様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 4 月 18 日現在

機関番号：34312
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：21500241
研究課題名（和文）　戦前期「外地」で活動した図書館員に関する総合的研究

研究課題名（英文）A Study of Librarians Overseas before the Second World War

研究代表者
岡村 敬二（OKAMURA KEIJI）
京都ノートルダム女子大学・人間文化学部・教授
研究者番号：90310664

研究成果の概要（和文）：
本研究は、戦前期、外地に存在していた図書館や資料室において活動を展開した図書館員について、その履歴や職歴、活動の実績などを総合的に調査・研究しようとするものである。その目標に掲げたのは、これら図書館員の人名辞典的なデータベースを完成させることであった。それがこの３年間の研究により、この人名辞典の過半を完成させ、それを冊子体の科研報告書として刊行することができた。そしてこの研究により、戦前期外地の図書館・調査機関で活動した図書館員の全体像をおおむね明らかすることができた。さらに、かれらが、図書館員としての仕事とは別に活動を繰り広げた文学・美術・出版・演劇などの領域にあってもその活動実態が明確となり、それらの領域の研究に対しても文献的・書誌的な貢献ができるものと考えている。

研究成果の概要（英文）：
This is a research about librarians overseas before the Second World War. The main aim of the research is assembling the biographical data of the librarians overseas. In three years for the research I compiled their biographical data and published a biographical dictionary in 2012 as an outcome of the research. The dictionary makes it clear that the librarians overseas, besides and beyond their usual work at the libraries, devoted themselves to a variety of social and cultural activities including editing literary periodicals and/or promoting reading education. The biographical dictionary also makes a contribution, bibliographical as well as philological, to future research in literature, art, publication and theatrical performance overseas.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
2011 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：総合領域
科研費の分科・情報学・図書館情報学 人文社会情報学
キーワード：満洲・満洲国・図書館員・大連図書館・奉天図書館・満洲国立中央図書館籌備処
台湾総督府図書館・朝鮮総督府図書館

１．研究開始当初の背景

本研究の課題である、いわゆる「外地」で活動してきた図書館員たちについての論考は、これまでにいくつか見ることができた。当人の回想や論述を別にすると、その人物論については、満鉄奉天図書館館長（戦後図書館協会理事長）衞藤利夫（小黒浩司「衛藤利夫―植民地図書館人の軌跡 1,2」1992 年）、満洲国立奉天図書館館長（戦後国立国会図書館）弥吉光長（岡村敬二「満州国で書物を司る」1995 年）、満鉄大連図書館長で戦後国立国会図書館・愛知大学教授を勤めた柿沼介（岡村敬二「満鉄大連図書館館長柿沼介の事績」1999 年）などのほか、楠田五郎太（米井勝一郎「満洲の楠田五郎太」1998 年）、大佐三四五（鞆谷純一「満鉄図書館と大佐三四五」2005 年）などがある。ただこれらはいずれもいわば大図書館において活動した館長や主任クラスに限られており、まだまだ「外地」で活動した図書館員全体を見晴らすレベルには到達していない。いうまでもなく、戦前期「外地」にはその数百倍数千倍の図書館員が存在しており、その活動は、これら総体としての図書館員たちにより支えられていた。そして、戦後日本の図書館界も、この「外地」活動図書館員たちを含み込んでその歩みを開始したのである。こうした全体を見渡すことのできる図書館員たちの客観的な事績の調査と歴史的事実の蓄積、資料面での基盤整備が是非とも必要であると考えた次第である。

次に本申請に至るまでの研究史を概観しておく。図書館員の論述集や回想については、はやくに柿沼介『剰語』(1972)、衛藤利夫『衛藤利夫』（1980）などが刊行されていたが、「外地」図書館員について論じたものについては、筆者が 1983 年に「図書館と戦争責任」と題して衞藤利夫を論じたものが早いものではなかったかと思う。

その後、『彷書月刊 特集 満鉄図書館』（1988）、や緑陰書房『日本植民地文化運動資料』(1992～)が満鉄大連図書館報『書香』、満鉄奉天図書館報『収書月報』、読書運動誌『満洲読書新報』など大図書館・研究機関の館報や読書誌を復刻刊行した。こうした機運のなかで、1990 年代になり、先述の衞藤利夫（小黒）、柿沼介（岡村）・楠田五郎太（米井）などの人物論が出るのである。また図書館界以外でも、日本植民地教育史研究会運営委員会『植民地教育史研究年報』（1998-）、東アジア近代史学会『東アジア近代史』(1998－）などが刊行され、『朱夏』で特輯が組まれるなど、「外地」の研究が発表され、研究が組織的なものとなっていく。

2000 年にはいり、科研助成においても、松原孝俊「台湾・朝鮮・満州に設立された日本植民地期各種図書館所蔵日本語古典籍の書誌的基礎研究」(2000-2001)、松野陽一「旧植民地所在日本書籍の重点資料の本文研究と総合解題目録作成についての研究」などがでる。中国本国にあっても、全国の日本語資料の所在調査が敢行され、2007 年に『中國館藏滿鐵資料聯合目録』として結実する。また「外地」における文化運動の研究や出版面の研究も展開される。国際日本文化研究センターで劉建輝代表「近代中国東北部（旧満州）文化に関する総合研究」が組織され、出版方面でも筆者の科研助成による研究「日本支配下中国・「満洲」における出版文化の諸相」（2001-2004）、「戦前期中国東北部刊行日本語資料の書誌的研究」(2006-2008）などが展開される。そして筆者の成果としては『「満洲国」資料集積機関概観』(2004)、『日満文化協会の歴史』(2006)、『満洲国出版目録』（全 8 巻、申請者監修、2008-2009）なども刊行にいたった。

このように、「外地」での旧日本語資料の所在状況や、「外地」出版事情についての研究、各分野の植民地文化研究などその周辺領域の研究環境が徐々に整ってきており、本研究の「戦前期「外地」で活動した図書館員の総合的研究」にあっても機が熟してきたと言えるのである。こうした先行研究のなかで、本研究が展開されたのであった。

２．研究の目的

本研究（研究課題：戦前期「外地」で活動した図書館員に関する総合的研究）は、戦前期に、日本の支配下にあった地域や日本による強い影響のもとにあった地域の図書館や各種文化機関、教育機関の図書室および資料室において活動した図書館員について、その事績を網羅的に調べようとするものである。具体的には、その所属機関や職種および役職、活動を展開した分野や、そこで執筆した論文や文芸作品、さらには終戦をどのように迎えて戦後に図書館や教育機関などの活動をおこなったかといった、履歴や職歴、業績などを総合的に調査して研究しようというものであった。その実際の作業目標としては、これら外地で活動した図書館員について、網羅的人名辞典的なデータベースを作成すること、そして順次、その事績について明らかにし人物論を展開していくことであった。

こうした調査をおこない研究を進めていくことによって、戦前期「外地」に存在した図書館や研究機関自体の活動実態があきらかとなり、そこで活動をした図書館員の活動が総体として把握できると考えた。そしてそれにより、戦後の図書館が再出発をするにあたって、外地で活動した図書館員たちが戦後の図書館界においてどのような役割を果た

したか、といったこれまで詳細には検討されなかった課題をも明らかにすることができることにあるわけである。

これら「外地」で活動してきた図書館員たちは、その地域において、図書館活動だけではなく作家としての執筆活動、教育方面での活動、さらには各種出版物の刊行などの面でも大きな役割を担ってきた。それゆえ本研究は、戦前・戦後の図書館・図書館員関連の研究にとどまらず、文学・美術・出版・演劇などさまざまな「外地」の文化活動の研究領域においても、その書誌的・資料的な寄与ができるというものである。

そしてまた強調しておきたいことは、近年にいたって、「植民地文化研究」との呼称により、「外地」における文化史研究が大きく進展をみせてきたことである。とりわけ文学・美術活動をはじめ各方面での文化研究や、図書館活動の基盤をなす「外地」での出版実態や日本からの資料移入、さらにそれら旧日本語資料の集積と戦後中国での所蔵状態なども徐々に明らかになってきている。つまり本研究のテーマとして掲げた「外地」図書館や図書館員の総体的な研究を支える周辺的な研究環境がようやく整いはじめ、機が熟しつつあること、言い換えると、そうした気運の中で、空白部分の多かった外地図書館およびその図書館員についての研究が、文化研究全体のなかでの一端を担うべきであり、担うことができると考えたわけである。

３．研究の意義と方法

次に、本研究の学術的な意義と方法について述べる。まずこの研究における意義を箇条書きにして示せば次のとおりである。

(1) 満鉄大連図書館や奉天図書館、満洲国立奉天図書館といった、大きな図書館の館長レベルにとどまっている現在の「外地」図書館員に関する研究状況に対して、この総体的・網羅的な調査・研究により、そのスタッフの全体像が明らかになるということである。つまり現況では、満鉄図書館であれば、大連図書館の柿沼介、奉天図書館の衞藤利夫、各沿線や省市の図書館長や主任の研究にとどまっていた。こうした状況を超えて、これら指導者のもとにありながらも、なお館務を支えてきた多くの図書館員たちの地道な資料収集や蔵書の構築、目録作成や広報誌の編輯、展示や文庫活動などの事績を明らかにしたいということである。そうすることで、外地の図書館活動の評価を試みるという研究基盤ができるのではないかと確信している。

(2) 戦前期から戦後にいたる我が国図書館の歴史研究において、その継続性また断絶性などを再検討するための客観的で総合的な書誌的資料的な情報を提供できることである。つまり、これら図書館員たちの戦前期の活動が、戦後の図書館の活動に、どのような影を落としているか、戦前期の図書館活動が戦後の図書館の歩みにどのような影響をあたえたかということを総合的にまた論拠を持って検討することが可能となるということである。つまりこうした検討が可能となる実証的な材料を用意することを目指したのである。

(3) 外地図書館員たちは、図書館活動以外の場面で、例えば文芸面や評論の領域また学術研究においても活発な活動を展開した。つまり図書館や資料室職員として、多様な文化的学術的な活動を繰り広げたわけである。戦後日本に引き揚げて以降も、日本において作家活動や学術研究活動に身を投じた人物も数多く存在している。戦前期外地での図書館や資料室現場における活動が、戦後の活動とどのように交差しているか、外地での図書館活動もまたどこか基層の部分で文芸的学芸的なものと重なっていたのではないか、といった活動の素地も、確認することができると考えた。

(4) 外地で活動した図書館員たちは、積極的に新収資料目録や各種分野の文献目録を編纂し、また館報を刊行し資料展示会を開催した。こうした目録編纂や館報の編集、展示会の開催や図書館の年史編纂などの事実を明らかにすることで、図書館や資料室・調査機関の活動実態自体も明らかになっていくと考えた。

(5) そして最後に、終戦を迎えるまでの間に、現地において、また終戦時に中国各地において、さらには終戦を迎えながらもソビエト抑留などにおいて、意半ばにして命をなくした図書館員についてもその事績を残しておきたいと考えた。そのように無念の死を迎えた図書館員たちの存在もリストに採録して残しておきたいと考えたのである。

こうした意義を踏まえてそれを実現するための方法を提示すると次のようになる。

(1) 外地に所在する大きな図書館の、比較的事績の明らかであった図書館館長レベルの人物の事績にとどまらず、すべての図書館員についてリストとして書き出し、その事績をできるだけ詳細に提示することである。いわば、海外で活動した図書館員についての、悉皆調査をするというものであった。

(2) それらの図書館員について、戦前の活動だけでなく、戦後の職歴やその活動、論著を明らかにするということ、つまり図書館の歴史研究において、その継続性また断絶性を射程において、論述していくことである。これは人名辞書ではありながら、そのような問題意識をそこに込めながら、作業を進めていくこととしたのである。

(3) また図書館以外の分野、例えば作家活動や評論活動、学術研究活動を展開した外地図書館員の、図書館職場以外の活動も、できる

だけ漏らすことなく調査し、事績に加えていくということである。そうすることで、この研究が、今後、他領域の研究においても寄与できる素地をつくることができると考えた。
(4) これら図書館員がおこなった目録の編纂や解題の作成、展示活動や展示目録、作家活動における雑誌の編纂と刊行、学術面での学会の形成と運営などを明らかにしていく過程で、結果として産出されることとなった諸資料について、その存在や所在を明確化することである。それらのなかには日本に所在のないものもあり、人名事典を作成するにあたって典拠とした文献名をできるだけ明示し、今後の研究に対して、書誌的文献的な資料整備となるようこころがけた。
以上が、この研究を実現するための方法とその作業である。
〈研究協力者〉
このような研究を効率的に展開していくために、米井勝一郎氏と鞆谷純一氏の二名に、研究の協力をお願いした。米井氏はこれまで公共図書館、大学図書館、専門図書館とさまざまな業務に関わってこられまた戦前期中国本土の図書館員やその図書館活動についての論文もおありである。鞆谷純一氏は、徳島県の高等学校の学校図書館司書として研究を持続しておられ、2011 年 10 月にはこれまでの研究を『日本軍接収図書 : 中国占領地で接収した図書の行方』（公立大学共同出版会）としてまとめられた。このお二人には、今回の報告書に原稿を寄せていただいている。

４．研究成果
この研究についての成果については、研究成果報告書（『戦前期「外地」で活動した図書館員に関する総合的研究』 173p）に結実させることができた。ここではこの報告書の内容を紹介することで、研究成果の説明にかえたい。報告書は、研究論文、訪書記・資料紹介、人名リストから構成されている。
(1) 研究論文…4 本寄せられた。まず橋本健午氏の「“戦前”で終わっていた父橋本八五郎の人生」である。この橋本八五郎は、満洲に渡り小学校訓導ののち大連図書館、また大連図書館司書係主任などを歴任した人物で、執筆者の橋本健午氏はそのご子息である。
佐竹朋子氏からは「佐竹義継の事蹟」を寄せていただいた。佐竹義継は、渡満して満鉄に入社、地方課教育係・学務課図書館係主任参事を勤めて図書館担当者として草創期の満鉄附属地図書館の整備に尽力した人物である。佐竹朋子氏は、この佐竹義継のひ孫である。このように戦前期に外地の満鉄図書館で活動をした人物の縁ある方々からその事績や回想について論考を得たということは、この研究の性格からしても、まことに意義あることであったと自負しているところである。
次に研究協力者の米井勝一郎氏からは、「尾道市立図書館の高橋勝次郎：メモとして」の寄稿を得た。高橋勝次郎は、樺太庁図書館や上海日本近代科学図書館で働いた楠田五郎太と並んで、図書館利用者への能動的な働きかけを重要視したとされる図書館員で、青年図書館員聯盟機関誌『圖研究』に多くの原稿をのこした人物である。
鞆谷純一氏からは「満鉄図書館時代の大佐三四五」の原稿が寄せられた。大佐は、満鉄に入社し大連図書館、さらに 2 年あまりをコロンビア大学に留学して同大学図書館学科を卒業した人物で、満洲にもどって撫順図書館館長、大連図書館司書係主任などを勤めた。このように、これらの論文は、満洲図書館など外地の図書館においてまた図書館史の場面において大きな役割を演じた人物についての研究成果となった。
(2) 資料紹介・訪書記…筆者はこれまで、現地で刊行されて日本に所在のないものを中心として、それら資料を随時紹介するよう努めてきた。今回は、著作集に未収録の衞藤利夫「本を盗まれた話」を紹介した。これは『月刊満洲』（第 12 巻 1 號 康德 6（1939）年 1 月、第 12 巻第 3 號 康德 6（1939）年 3 月）に寄稿したもので、大正 10（1921）年秋、奉天図書館新築間もない頃に衞藤が古書店から購入したアレキサンダー・ワイリー（Alexander Wylie、偉烈亜力）の未刊草稿 12 冊が盗難に遭った事件のその顛末である。この『月刊満洲』の記事は、当時の状況について細部にわたって書かれてあり、実名も挙がっていて内容的にも充実したものである。
訪書記については、2009 年 10 月に訪れた秋田県立図書館・岩手県立図書館および内藤湖南生誕である毛馬内の資料館のものをおさめた。このうち湖南の毛間内訪問記には、参考として、「大阪府立図書館展覧会の歴史ー図書館ものがたり その１」を収録した。ここには東洋学者内藤湖南の、大阪朝日記者時代での、古書の収集などの事情が描かれていて、参考になると考えたのである。
(3) 「戦前期「外地」活動図書館員リスト」…当初は、中国本土や、台湾、朝鮮、樺太などすべてを網羅する意気込みで調査を開始し事績を蓄積していったのだが、資料的にも、また筆者のこれまでの研究内容からしても、満洲地域が厚くなり、朝鮮の図書館員については資料も集めてあったのだが、この報告に十分には反映させることができなかった。こうした事情から、各図書館員の事績に関してはいささか精粗があり、また載せるべき人物が抜けていたり、また記述が十分でない個所も存在しているかと思う。それらについては、今後とも精進して完成に向かいたいと思う。

〈資料展示と図録刊行〉
　最後に、今回の研究過程で開催した２度の資料展示と図録刊行について述べておきたい。これは、この研究過程で得た知見を広く発信し、これまで購入してきた資料を紹介して有効な利用をはかるために企画したものである。つまりこれらの研究を、学内外に紹介していくことを目的として開催したものであった。
(1) 一度目の展示は、平成 22 年 3 月 13 日から 4 月 3 日までの会期で『満洲の図書館』と題して開催された。その展示図録は『満洲の図書館』(32p カラー版) として 3 月に刊行した。またひろく参加を呼び掛けてギャラリートークを開催した。
(2) 二度目は、平成 23 年 3 月 29 日から 4 月 12 日までの会期で『終戦時新京 蔵書の行方』と題して開かれた。展示図録『終戦時新京 蔵書の行方』(32p カラー版) は 3 月に刊行され、ギャラリートークも開催した。
　これら図録については、資料展示期間中に、来会者に進呈し、さまざまな機会に関係者へ寄贈することで、本研究の成果を広く社会に還元するように努力した。
　この図録については、残部のあるかぎり今後も希望者に進呈したいと考えている。

５．主な発表論文等
〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 5 件)
①岡村敬二、『研究成果報告書 戦前期「外地」で活動した図書館員に関する総合的研究』、科研報告書、2012、173p
②岡村敬二、『資料展示図録 終戦時新京 蔵書の行方』、2011、京都ノートルダム女子大学、32ｐ
③岡村敬二、『資料展示図録 満洲の図書館』、2010、京都ノートルダム女子大学、32ｐ
大学人間文化学部人間文化学科「文化の航跡」刊行会、100p
④岡村敬二（共著)、『京のキリスト教－聖トマス学院とノートルダム教育修道女会を訪ねて』(「文化の航跡」ブックレット 6)、査読無、2012、京都ノートルダム女子大学、306p
⑤岡村敬二（共編)、『京の町歩き－東山山麓フィールドワーク』(「文化の航跡」ブックレット 1)、査読無、2010 年、100p

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件)
○取得状況（計 0 件)

〔その他〕
ホームページ等
京都ノートルダム女子大学ホームページ
http://www.notredame.ac.jp/ningen/study/study_2010.html（教員の研究)
に順次掲出した。

６．研究組織
(1)研究代表者
　岡村 敬二（OKAMURA KEIJI)
　京都ノートルダム女子大学・人間文化学部・教授
　研究者番号：90310664
(2)研究分担者
　なし
(3)連携研究者
研究協力者
　米井 勝一郎（YONEI KATSUICHIROU)
　愛知県議会事務局調査課
　鞆谷 純一（TOMOTANI JUNICHI)
　徳島県立鳴門高等学校・学校図書館司書